

# 労協クラブ 10周年誌

資料集

社会的経済連合めざし、大きく踏みだそう

7月26日、東京労協クラブ・みちの会の定期総会が労協連本部・大会議室で開かれ、46名が参加しました。今回の総会では、「プロジェクトの活動が実践段階へと進みつつあるとの到達点を確信に」、センター事業団、労協連合会と連携を深めながら、労協クラブの活動を一層発展させようと確認されました。

冒頭、岩城雄作会長  
が挨拶。6月の総会・  
総代会は、協同労働の  
協同組合法制定化前夜と  
いう情勢下で、大変意  
気高いものとなり、全

その後、古谷直道労  
協連理事長、東京商工  
会議所・川村耕太郎常  
任参与から来賓の挨  
拶がのべられました。

案が提案され、2006年度は、社会的経済



前にてて挨拶する新役員

に新役員の提案が行われました。  
質疑・討論では、内野富夫副会長から「草の油田構想について長谷川朗幹事から、「私のキューバ視記」として、センター事業団20周年記念ツ

7月31日、さいたま労協クラブ2007年度総会が、センター事業団東関東事業本部会議室で開かれ、さいたま労協クラブ会員、東関東事業本部の組合員あわせて40人が参加しました。(東関東事業本部・前田圭一)



会員ら 40 人が参加

農環境プロジェクトをはじめとする3つのプロジェクトを推進してきたことを報告。  
2007年度方針では、労協クラブの全国展開などを進めよう。

連合をめざす方針を検討し議論をしてきたことと、これを基本に、定例会（会員を対象とした勉強会）の開催など、食

アリについて発言。その後、満場一致ですべての議案が採択されました。

会的経済連合」をめざす  
労協クラブの展望」と題し、記念講演。

吉田健一事務局長から挨拶をいただきました。

て、第一部が終了。  
第2部では、中川光  
朗氏(農業経営研究所、  
代表)が「福祉とチユ

7月31日、さいたま労協クラブ  
2007年度総会が、センター事業団東  
関東事業本部会議室で開かれ、さい  
たま労協クラブ会員、東関東事業本  
部の組合員あわせて40人が参加しま  
した。(東関東事業本部・前田圭一)

会員ら40人が参加

化プロジェクトとチユ  
フル水耕栽培』のテーマで、武井裕之さん・中川光朗さん・内野富夫さん・横山哲平さんが、4人が発言。富田孝好さんがコーディネーターをつとめました。

その後、2007年度役員体制が提案され、すべての議案について、全員一致で承認されました。新役員を代表して、内野富夫新会長が挨拶、小林司さ

流会が行なわれ、深谷だんらんの豆腐料理をはじめ、群馬事業所の中里所長が作った「どんどんフライ」(白もつやのフライ)。前橋の七夕祭りで1200本を売り上げた)が、とても好評でした。

会員同士はもちろん、センター事業団東関東事業本部との懇親も深まる、楽しい総会でした。

7月31日、さいたま労協クラブ  
2007年度総会が、センター事業団東  
関東事業本部会議室で開かれ、さい  
たま労協クラブ会員、東関東事業本  
部の組合員あわせて40人が参加しま  
した。(東関東事業本部・前田圭一)

会的経済連合をめざす  
労協クラブの展望」と題し、記念講演。  
第3部として楽しく  
なごやかに懇親・交流  
会が行われました。

吉田健一 事務局長から挨拶をいただきまし  
た。

て、第1部が終了。第2部では、中川光朗氏(農業経営研究所)代表が「福祉とチユラル水耕栽培・農家の所得向上をめざしたコンサルティング」のテーマで講演。第3部では、懇親交流会が行なわれ、深谷だんらんの豆腐料理を



# 労協クラブ(きいたま・東京)合同幹事会

さいたま労協クラブと東京労協クラブみちの会は、4月19日東京池袋・ハナシンビルで合同幹事会を開催。企業家、会社役員、研究者など約40人が参加し、これまでの取り組みと検討課題について意見交換しました。また、食・農・環境プロジェクトの取り組みでつながった無農薬栽培などにこだわっている方から実践報告がありました。

3つのプロジェクトから  
報告。農・環境等でも議論

今回の合同幹事会は、東京とさいたま、それぞれの幹事会で検討してきた3つのプロジェクト（①食・農・環境②住まいとまちづくり③福祉）について、専門家、実践家も交えて議論していく趣旨から拡大う幹事会として開かれました。

最初に東京労協クラブの岩城雄作会長が、

事業団の永戸祐三理事長が、4月12日に労協クラブ内野副会のはからいで滋賀県の嘉田由希子知事との懇談が実現した。人のつながりで公共サービスをつくりだす時代である以上、や社会的連帯の再生について意見交換ができる有効だった」と報告。「そういう時代の中で労協クラブへの期待は高い」と挨拶しました。

の活動を紹介 センタ―事業団との連携で指定管理者制度への挑戦も提起されました。また、活動方針としては、社会連帯委員会との関係を強めること、宮城、神奈川、富山、大阪、広島、福岡の箇所に労協クラブ設立のメドをつけることが提案されました。食・農・環境プロジェクトから2つの実践特

培<sup>テイ</sup>」にして説明、簡便な設備で無農薬栽培が可能となる技術が開発され、そのことが障がい者や高齢者、あるいは団塊の世代の仕事おこしとして大きな可能性をもつと報生しました。

全国の莫大なといえる滋賀県環境生協の活動を紹介し、その中から生まれた菜の花プロジェクトの取り組みを、直接取材した映像を映し出しながら説明。また、内野さんは「草の油田構想」の今体像を説明。農業と環境を結んで活発に議論し合同幹事会を終わりました。(富田)

合同幹事会を開催する目的を述べ、長崎市の伊東市長への銃撃事件について「民主主義への重大な挑戦である、ゆるすことのできない蛮行だ」と語りました。

検討課題では、東京労協クラブ・富田孝好事務局長が「これまでの取り組みと到達点」を報告。

## 環境・農の実践 別報告がありました。

プロジェクト「草の油田構想」(菜種油から食用油をつくり、廢油はディーゼルエンジンなどに使う)について報告しました。

別報告がありまし

環境・農の実践



東京は100人が参加し品川氏を囲んで記念撮影

## 3ヵ年で1000会員めざす



埼玉では67人が参加し鈴木氏の講演を聴いた

岩城会長が、賀詞交歓会に先立ち第1回労協クラブ全国推進会議を開き、「3ヵ年で1000人の会員を実現」することを総意で確認した、と報告。さらに「日本型社会的経済（企業）連合をめざし全国に労協クラブを」と訴えました。

来賓の日本労協連菅野理事長は、記念講演の品川氏の著作を紹介

労協クラブは、1月25日に東京で、30日には埼玉で新春の賀詞交歓会を開きました。記念講演にはそれぞれ品川正治氏（経済同友会終身幹事）、鈴木英敬氏（内閣官房参事官補佐）を迎えました。

東京

東京

経済同友会  
終身幹事  
品川正治氏

埼玉

内閣官房  
参事官補佐  
鈴木英敬氏

ウラガラブ

# 東京と埼玉で新春賀詞交歓会

しながら「いま、時代に問われているのは、人間自身が状況を創り出す責任を負い、資本・国家から人間の未来を取り戻すかどうかだ。どちらの立場に身を置くのかということだ」と挨拶しました。

記念講演に立たれた83歳になる品川正治氏は、「戦争がうち続く中であと何年かで必ず死ぬという極限の中に入れられたのは、自分が生きていた証をどう世に問うのか」ということで、国と国民をいつも考えてきた。軍や政治には疑いを抱いていた。中国の日本軍では敗戦が徹底されず8月15日以降も戦争を継続し死亡した人もいる。

敗戦後は、戦争をおこしたのは人間、それを止めることができるのも人と考えるようになつた。経済は平和だから発展する」と靖国問題にもふれながら講演。感銘を与えました。





# 戦争を 戦争を 奴

戦争をおこすのも人間なら  
戦争を許さない、止める  
努力ができるのも人間

九条二項をもじ手放してしまった  
から、地球上からその理念が消えて  
しまつわけなんです。ですからど  
んなことがあっても、私たちをな  
放したくない、手放すべきではな  
い、と思ってるわけなんですよ。  
旗はほんとうにボロボロになつ

ています。しかし60年間、日本は  
主権の發動として外国人を一人も  
殺していない。  
それが軍事複合体といふもの  
をつくるらいで、世界一位の経済  
規模を実現している。これは九  
条があつたためです。

旗はボロボロでも、旗竿を離さ  
なかつた日本の、これから世界  
における役割といふのは、おそらく  
それなりに軍事複合体といふもの  
をつくらないで、世界一位の経済  
規模を実現している。これは九  
条があつたためです。

ローガンでした。  
しかし一番重要なのは、  
日本は資本主義をつ  
くり、資本主義をつ  
くらうとしたときに、そ  
れに反対して皆さんは  
自慢をもつていただきた  
い、というふうなたた  
かう、といふことです。

ところが、日本  
あるいは世界一位  
現れてきた道とい  
うか型の主義です。  
「修正資本主義」  
よまれておられます。

日本資本主

おこすのも人間を許さない、止むを得ぬ力ができるのもあります。しかし60年間、日本は主権の発動として外国人を一人も殺していない。それから軍産複合体といふものを作つくるしないで、世界二位の経済規模を実現している。これは九条があつたのです。

## 日本の「価値観」は違う、ノーといえるのは国民

さすがに沖縄の地方紙は「紙とも、日本の価値観が一緒だといふ前提には、いっさいたらないです。」としながら、「日本は、長崎もそうです」といふ。これが日本のマッシャーの新聞はぜんぶ、日本の価値観は「一緒だ」。一緒にでも、アメリカは「違う」。う行き過ぎをとどけるが、そういう形で問題をだしてきているわけですね。

違います、どうしていいえないのか。迎いますと言つてから論議するのと、一縁だといつてから論議するのとでは、ずいぶんちがつてくるんです。

日本の憲法九条からいえば、世界に敵がないという点をいついてる。ところがアメリカは名指しをして、次々にあれが敵だ、これが敵だといつてる。そういう形でもし、ほんとうに日本が軍事同盟の形になつてしまえば、日本はいたるところで敵がいる、格好になるわけです。

わたしは小泉さんが一番その点

旗はボロボロでも、旗竿を離さなかつた日本の、これから世界における役割というのは、考へられないくらい、大きな役割をもつていく。それに対して皆さん方は自信をもつていただきたい。

人間なら、ローガンでした。しかし一番基本にあったのは、日本米の価値観は、純たんといふにこから、資本主義をアメリカ型にする、といふことだつたわけです。

## 日本の資本主義とは

ところが、日本の戦後の復興あるいは世界一位の経済大国を實現へいたした道といふのは、アメリカ型の資本主義ではなかつたんです。「修正資本主義」といふことは、よばれていますが、成長の分前は国民でわけるというのだが、日本の資本主義だつたわけです。成長の利益はすべて資本家に属すなんていふ考え方はどこからも出てこなかつた。また持つべきだ、ないという感じでした。それを資本家のための資本主義が正しいんだ、といふかつていうなつて、市場原理主義で、すべて市場が決める形にした方がいい、という風にしてしまつた。

福祉だとか、環境だとか教育とか、それさえも市場にまかせなつて、市場原理主義で、すべて市場が決める形にした方がいい、尊厳とか努力とかいうものは、う考へているのか。う考へているのが、はいりやう考へていますとこ

私自身もかつて、保険会社の長として、経営のトップになつたんですけども、市場の評価だけ

メルクマールだといふ、そんなん鹿などは、考えたこともなかつたです。社員、得意先、まずはそれを前提にして、社会との調和の

とれども、馬が走るのと同じく、日本のGDPは世界で最も大きい。それゆえ、日本の社会保障費は世界で最も多く、社会保障費を構成する年金、医療費、介護費などは、年々増加の一途を辿っています。一方で、日本の年金制度は、年金水準が国民の平均年収よりも低い状況が続いていることから、年金水準の引き上げが求められています。また、医療費や介護費の高騰により、年金制度の財政難化が懸念されています。

日本は、ハブルが崩壊したときに、企業を助けるために、1%のGDPをあげるために、他の政府は使った。そんなこと、政府はどこでもできません。それを日本は、えてやつて、世界一の借金政府になつたわけです。

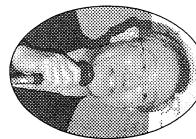
た。たゞ、この「かじり質問に答えた」の東京労協は、今もまだ存在する。「ジャーナリストの使命は、事実を正確に伝えること」。事実を正確に伝えることは、社会の公正主義を重視合わせることだ。本日ヨーロッパの社会で、「トロイア、アントニウス、カエサル」など、古事記が出ており、これが、田長や堀城の三村耕太郎相談役の乾杯の音頭で杯を挙げ、永吉会長が買田新鮮な雄前会長から準備された贈り物を賞味した。魚や焼き鰯を賞味。

賀詞父儀会 最後にひいたまた協定が定められ、午後5時半からの新春賀詞交歎会では、日本本労協連の古谷直道理事長が「今日は、法制化が『今』です」と挨拶にて、中央労福の笹森清会長が「今日は、法制化を実現するために、参加してたascoーに参 加してた」と前置きし、「これからこそ、労働法改正の講演」を期待してもらおう」と歓迎された。記念講演は、大谷昭彦ナーストの大谷昭彦博士による「07年度第2回定期労協クラブ」が共に開催され、立田要副会長が定例会の開会挨拶。最後にひいたまた協定が会場を覆いました。

日本に絶対必要な法制化(笠森) フィルムズ・コープに期待(大谷)

1月25日、新しい年の幕開け式にて、協同労働法制度化を目前にして「東京労協クラブ みらいの会」と「ひたち労協クラブ」が共同で主催し、東京・池袋の生活産業プラザで「2007年度第2回定期例会・新春賀詞交歎会」を開催。約100人が顱參会せられた。記念講演にて、太田昭彦演説にて、宏氏を迎えて、交歎会は西園の労協の手作り番組にて鼓を打ちました。

### 第2回定期例会・新春賀詞交歎会



法制化市民会議会長 笹森清さん  
大谷昭宏さん  
ジヤーナリスト  
食・労働・住・人間  
の生活の基盤で偽物が横行する展望が見えなが  
い時代だが、地域をつなぐ業を興し、地域で事  
業を運営する。キラリと光る本物に期待している。





左から労協クラブ内野副会長、嘉田滋賀県知事、労協連永戸副理事長、滋賀高齢協山口専務

「人と人がつながり新しい公共が生まれる」

嘉田由紀子滋賀県知事は、京都駅と目と鼻の先に新幹線の駅を建設するという動きに対し、「もったいない、やめるべきだ。未来への貴重な投資として生きるのか、生きない」と立ち上がり、市民を振り動かし、

いること、高齢者への  
お弁当の配食を安否確  
認も含めて行い、離れ  
て暮らす家族からも安  
心されていることを紹  
介。

あつて、新しい公共が  
うまれてくる。それに  
は具体例がないと。筆  
の力、語る力、絵でも  
写真でもいい。目に見  
える形にしていくこと

また、全国の子育てが大事」と共感していく現場や配食弁当の現れました。

労協連の永戸副理事長は、学童保育や老人福祉センター等、全国での公共サービスの実績を紹介し、夕張の事態にもふれながら、市民が公共の役割を担い、公共サービスを増進する仕事をする場合

に、地域、自治体が援助して成功させるようにすることが必要だ。社会の連帯性の再生、社会的正義のために、市民自身が生き生きと公共を担えるよう、「ミニユーニティ就労支援条例が必要であり、ぜひ

検討していただきたいと要請しました。

にして利用者や地域にも届けることで、応援してくれる人が増えているとの話に「そういう手記、物語が本当に大事。みんな語りを求めてているし、発信するに必ず返ってくる。一 共的 세계의なかで公共サービスをつくりだす時代」と話されました。

との懇談は、知事と同郷である辻協クフブ内野富夫副会長のはからいもあり実現したもの。センター事業団の富田常務理事、杉本関西事業本部長、花崎滋賀エリアマネージャー、山口滋賀高齢協専務が同席しました。

の現場や配食弁当の現場では、その実践や高齢者の生活をニュース会では、人、文化、自会では、人、文化、自  
また、県職員の研修  
れました。

お弁当の配食を安否確認も含めて行い、離れて暮らす家族からも安心されていることを紹介。高齢者への新しい公私分離がうまれてくる。それに具体的例がないと、筆の力、語る力、絵でも写真でもいい。目に見える形にしていくこと

卷之三

# 協同労働5団体、初の合同役員会議



笠森会長が連席あいさつ。  
右が労協連古谷理事長、左  
は高齢者生協連兵藤理事長

## 協同労働運動の総合的発展を 生活・地域再生、社会連帯へ

日本労働者協同組合連合会、日本高齢者生協連合会、センター事業団、協同総合研究所、労協クラブの5団体は「協同労働の価値と可能性を地域再生・社会連帯へつなげる協同労働運動の総路線の全般的な推進を」と、史上初めての「合同役員会議」を11月22、23日、東京で開き、1日目は91人、2日目は69人が参加。覚悟と決意を新たにしました。

### 協同労働を社会的財産とする節目、法制化署名さらに

最初に労協連古谷理事長があいさつ。「6月の総会では『協同労働運動の総路線』を打ち出し、協同労働運動の社会的貢献を飛躍的に増大させ、法制化を実現しようとした。協同労働によって21世紀の日本社会に改革をもたらそうとしている主な組織の役員全員が

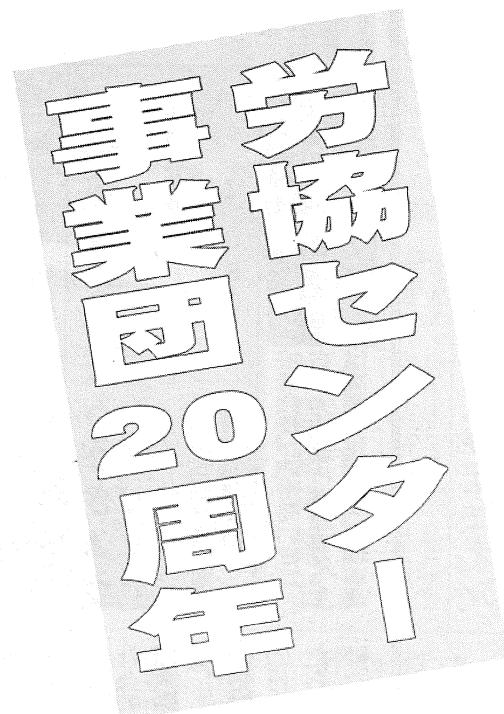
一堂に会した初めての会議であり、それぞれの組織の戦略的役割と任務を明瞭にしていくたい」と提起。さらに、総路線にもとづくこの間の活動の特徴として、①法制化運動の飛躍的前進②公共サービスの社会化とワーカーズコープの事務拡大③食・農・環境の取り組み④センター事業団の発足⑤対人直接会の発足⑥サービス領域から幅広い分野での展開へ、労協クラブを中心とした

NPO事業サポートセンター宇都木法男専務、ワーカーズ・コレクティブネットワークジャパン藤木千草代表が共にがんばる決意を表明し、古村伸宏労協連専務が「30年かけて、事業団運動から労働者協同組合運動へ

68 /上 時代の変革



新たな決意を表明する永戸祐三理事長



# バイオ燃料を日本独自の方法で 「草の油田」を構想

**内野富夫 東京労協クラブ副会長**

## 早稲田大学で報告、強い共感

労協クラブで検討している菜の花プロジェクト「草の油田」構想が、農林水産省が推進する国産バイオ燃料の本格的導入とも相まって、環境問題にきわめて有効な日本式モチベーションになると注目を集めています。労協連およびセンター事業団東関東などを中心に事業化を準備しています。

この構想は、内野富夫(長・労協連合会理事(京) 締役=写真左)が原案夫東京労協クラブ副会長 和装備株式会社常務取

を発起したもので、7

## 環境問題・遊休農地・雇用・食糧問題 統一的解決に貢献

### 内野さんの報告要旨



私の会社は自動車の内装部品の製造メーカーだが、個人的には農業後継者である。仕事の関係上、自動車のエンジン部門の方々とも交流がある。そこで

B・D・F(バイオ・ディーゼル・フュール)を使用するクリーンディーゼルエンジンと結びつけた。

現在のバイオ燃料の開発のあり方は、一步間違うと、食糧不足と家畜の飼料不足を招く。アメリカでは、とうもろこしからB・E・F(バイオ・エタノール・フュール)を作り、とうもろこしの高騰を招いた。ヨーロッパでも

は食糧に使う菜種油をB・D・Fに使用し、菜種油とマヨネーズの高騰を招いている。そうさせないためにも、バイオ燃料を日本独自の方法で作り出す必要がある。

幸いにも日本には米文化があり、稻ワラと山林の間伐材・木材家の廃材・菜の花の茎等もあり、食料に影響をおよぼさないかたちでのバイオエタノール

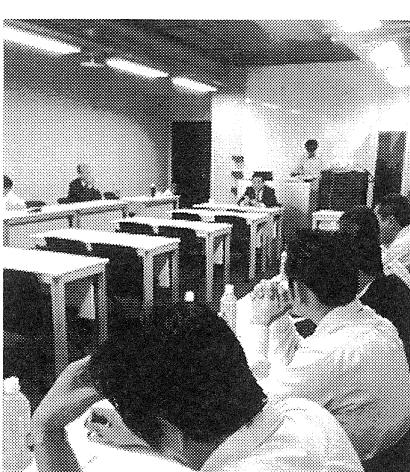
の開発が可能である。今回の話は「草の油田」構想なのでB・D・Fに話を絞る。

まず菜の花を栽培する。付加価値を上げるために「養蜂」と結びつける。秋に菜の花の種を蒔き、春に一番美味しい菜の花の花芯に蓄えられた蜂蜜を採集して販売し、六月に一番絞りの美味しい「菜種油」を機械絞りをして販売する。その後、残留油を絞り、食廢油と混合し、バイオ・ディーゼル燃料として

一〇〇%バイオ・ディーゼル・フュールには軽油取引税がかからず、かなり安価で生産できる。二番絞りの油かすは高品質な有機肥料として差別化をし

て販売できる。菜種油採取後の土地では、古来から地域にある様々な薬草(ハーブ・そば・やぶがら・山にんじん等々)を育て、夏から秋にかけて薬草入りの「百花蜜」を採取する。

日本は未耕作農地が多い。にもかかわらず、農業の担い手がない。一方、団塊の世代は問題意識が高い人が多い。この構想はこうしたことを結びつけ、「環境問題・遊休農地・雇用・食糧問題」を統一的に解決する一歩になる。



熱心な質疑応答も

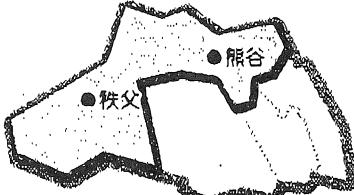




埼

(第3種郵便物認可)

# 県北



県北支社 048-521-0819

購読

## 菜種の二番絞り+食廃油



菜の花の種子の作業を始めた本田

## 深谷でプロジェクト始動

東事業本部の横山哲平本部長は「深谷市をはじめ、埼玉県内全体に菜の花プロジェクトを抜けたい」と話す。田代は「皆さんあるが、事業化に向けて二番絞り+食廃油を混ぜたバイオディーゼル燃料精製で協力する(セイベック)(東京)の結城孝明氏と、「菜種の二番絞り+食廃油をもじこしたバイ

菜の花プロジェクトとバイオディーゼル燃料が名附いた取り組みは、同業化できれば、おもいぐれ市の中西千恵子さん方畑(約20ha)に「サザキノナタネ」をもらい、同センター事業本部の岡元かり子さんが始めた。構想では、ミツバチを使ってハチミツを集め、一番絞り+食廃油、二番絞り+バイオディーゼル燃料、絞りかけで肥料を作る」としている。

同センター事業本部  
説明した。

菜の花栽培は九月から翌年の六月にかけて。六月から九月にかけては、ババを栽培して、二作で畠の活用を推進するとしている。今後の構想では、今月二十日(木)に北本市内の一町五反(約150ha)の畠で同様の取り組みを行うところ。

# バイオ燃料精製へ